

昭和二十四年七月二十五日 第三種郵便物認可
昭和四十二年十一月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第二二二号)

慈光

第十九卷 第十一号

次

近角常観先生の追憶……………福島政雄…(1)

菅瀬芳英師五十年忌を迎えて……………西本清人…(7)

近代的めざめと宗教心……………宮地廓慧…(12)

目

兄の霊前に申す……………松村繁雄…(15)

賢に遇えば自ら寛なり……………花田正夫…(18)

情熱と信念に生きた人

近角 常観 先生の追憶
福島 政雄

底の底まで見とおされる師

近角先生は、明治、大正から昭和にかけて熱烈に親鸞聖人の教を説かれた方でありますが、私は二十六才の春から先生の御講話を聞きはじめました。

その夏の求道会で阿闍世王入信文についての講話を、一週間続けて拝聴しましたのが御縁で、七月十一日の夕方から心機一転してお念仏申す身となりました。それは実に不思議な心機転換、すなわち廻心でありました。

自分を温かい心の持主と考えて、教育における愛の理想を思い、ひとかど思いあがっていた私が、先生の御講話を拝聴して自分の如実の姿が見えはじめたと申しましようか自分は冷たい氷のようなものではないかと感ずるようになりました。

先生はよく隔て心と仰せられました。われわれには隔て心が止まない、人に対して隔てよう隔てようとする、その隔て心を見とおしてあくまでもこれをあわれみ

どこどこまでもその隔て心ある汝を見棄てないと仰せられるのが、仏さまのお慈悲であるとお説きになりました。

その頃の私は結婚問題で父母に対して隔て心を持ち、勝手なことを申して父母を苦しめ、自分も悩んでいました。

それで先生のお話が身にしみるようになったのです。

先生はまた五分五分根性ということを始め仰せられました。われわれは五分五分根性が止まない、他人が自分を五分だけよく思うてくれると、自分もその他人を五分だけ善く思う。

しかし五分だけ悪く思われると、こちらからも五分だけ悪く思う。この五分五分根性で対立して行けばいつまでたっても他人と融け合うことが出来ない。

しかるに仏様は、その五分五分根性のわれわれを可愛そうに思って、われわれに対して全生命のまことをそいで下さると、この仏さまの絶対のまことに気がついて来れば自分としては頭がさがるよりほかはない。

その絶対のまことに融かされると、人生問題はここから解決されて来る。先生が人生問題と信仰をお説きになる時いつもこのように仰せられました。

先生は鋭く私共の心持をお察しになりました。元来、政治的の手腕能力を十分に具備していた方で、しかも政治に向わずに純粹一途に信仰をお説きになったのですから、その天賦の御能力は、鋭く人の心を見抜くという形で發揮せられました。

先生の前で一言申せば、先生はその言葉の底の底まで見とおされるといふ有様でありました。私の友人などは、先生の前に出ると「仏かねてしろしめして」といふ歎異鈔のお言葉がそのまま先生であるような気がすると云っていました。

姥捨山のおしえ

求道学舎、後には求道会館でいつも日曜の午前に御講話をされましたが、お話をなさりながら次々に入ってくる人を御覧になって、今日はある人が来ているから、講話をあの方面に向けようと考えられて、その人の凶星にあたるような講話を次々となさいました。

先生は大音楽の指揮者のようで、会館に集った人々のそれぞれに適切なお話をされたので、集った者はみな、自分

の心に徹するお話を承わったということになるのです。おもえばお釈迦さまの説法もこのようであつたので、それぞれのお弟子が皆それぞれに育てられたのだと思います。

先生がよく繰返してお話しなされたのは姥捨山のお話でありました。

親不孝息子が年老いて役に立たなくなった母親を背負うて奥山に捨てて行くのであります。母親はその途中、息子の背から手をのばして道ばたの草の葉を結んだり、木の枝を折ったりして道しるべを作っています。息子はお袋がこんなめじるしを作って、これを目あてにして帰って来るつもりかと考えながら行きます。いよいよ山の奥まで行って母親を草原におろし、

「お母さんもよくわかつているでしょう。気の毒だけれど今日この山奥に捨てに来ました」と言います。母親はそれに答えて、

「そのことはよくわかつていた。自分はもう何の役にも立たない穀つぶしだ。お前に捨てられるのは当たり前とおもう。お前はまた先長いことだから、よく身体に気をつけて達者に暮しなさい。お前が帰って行く道に迷ってはいけないと思つたから途中で道しるべのしおりを作っておいた。あれを目じるしにして、迷わずに帰って行きなさい。随分からだを大切に」と云います。

この最後の無限の慈愛の一言が、息子の中にしみとおるのであります。息子ははじめに自分が親不孝者であることに目がさめ母親の前に泣きふします。そしてあらためて母親を負うて家に帰り、親孝行息子になります。

この姥捨山のお話を私は何十度繰返して先生から承つたかわかりません。先生はわれわれはこの親不孝息子のようなものである、と仰せられました。自分の煩惱に心まよいあらん限りの悪いことをして親である仏さまにそむき、仏さまを捨てているそのわれわれを、仏さまの方ではどうしても見捨てることが出来ないで、あくまでも眞実心を注いで下さる。

われわれが悪ければ悪いほどなお一層われわれをあわれんで下さる。その仏陀の眞実心がわれわれに徹するのである。そこで始めてわれわれは自分の浅ましい姿に目がさめ仏陀のまことに融かされてお念仏申す身となることが出来る。感恩報謝の生活がそこからはじまると、先生は懇切にお説きになりました。

手織木綿のたとえ

いま一つ、先生がよくお説きになったおたとえは手織の着物のお話であります。

いたずらつ児が着物を片っぱしから破ってしまいます。

そこで母親は丈夫な手織の着物をつくって、その児に与えます。その手織の着物は母親の慈悲心のかたまりなのです。そのように仏陀はわれわれが立派な行も出来ず、やぶれかぶれの有様を御覧になって心からあわれと思召し、その手織の着物であるお念仏を賜るのであります。お念仏は、仏様の全慈悲がこもっているお呼びかけの声であります。

手織の着物のおたとえは私の心の底にしみ込んでいます。私は青年時代から、長いあいだ母の手織の着物を身につけていました。どんな具合か私は和服を着ますと特殊の場所をいつのまにか破っています。妻も私にそのことを注意してくれましたが、破れることはなおりません。和服をやめて洋服を多く着るようになります。ズボンの下の特別の箇所がいつのまにかまたやぶれています。

私の身体の動かし方によくよく悪癖があると思えます。私の心もそれに似た有様で始終やぶれかぶれであります。それで手織の着物のおたとえと共に、母をおもい、母を想えば仏陀の慈悲を感じます。

いまから四十年前、私が仙台にいました頃、八月の三日に長女の和子を亡くしました。数え年の四つで、可愛いさかりでした。ところが先生もその同じ八月に小さなお子さ

なりなされたということをうけたまわっています。

時間・比喻・態度を超越した師

先生の最初の求道煩悶は非常に烈しかったのですが、それは非常に真面目な求道の煩悶でありまして、そのことは先生が御自身で懺悔録の中に詳しくお述べになっています。

なお先生の御著述で「信仰の余蘆」とか「人生と信仰」などは、私が最初に熱心に拝読したものであります。先生の御信仰が開けた大事な御縁は先生の御父君であったやうであります。

九才の時とかに御父君から姥捨山の御話を聴きになり御信仰が開けたのは三十歳ごろの御時とうけたまわっています。その後は姥捨山のお話が御信仰の上に生きてきたのであります。

先生はこのように真剣なお方でありましたので、ろくでなしの私などは大変なお叱りを受けたことがあります。西洋から帰りました頃の私は浮調子になっていて、先生に向かって「煩惱というものも大切なものと思えます」と申し上げました。先生は大変にお叱りになって「西洋に行った人間はよくそんな気分になるが、それは大まちがいだ」と仰せられて、厳しくお叱りになりました。

先生は求道学舎で帝大の学生を数人ずつ世話しておられました。先生は求道学舎で帝大の学生を数人ずつ世話しておられました。先生は求道学舎で帝大の学生を数人ずつ世話しておられました。先生は求道学舎で帝大の学生を数人ずつ世話しておられました。

その奥様も最初は先生に対していろいろお求めになる心があったと見えます。よくよくとお考えになることが多かったらしいのですが、先生はその事を聞かれ「お前はそんなに親切に俺のことを考えていてくれるが、俺はお前のことなんか何とも思っていない」と仰言ったそうで、この一言が奥様の心とおって、それから奥様も信仰の人とお

先生は西洋をおまわりになって御帰朝の時には涙をもつて御父君、御母君の御恩を感じられたというのでありますから、私の浮調子なのをさぞ仕方のない奴と御思いになったであります。それでも一面では私をよく認めて引立てて下さいました。

先生は親鸞聖人の御述作その他の御聖教をどれだけ深くお読みになったてありましようか、御聖教の文句が先生のおいのちに生きていました。教行信証をはじめ御和讃の句が御講話の時にすらすらと、しかも熱烈に口をついて出たのであります。それが先生の熱意と一つになって来るのですから、私も信仰の火の玉をあびせかけられるような感じで御講話を拜聴したものであります。

ある人が「先生には三超越があった」と言われましたがそれは態度超越と比喻超越と時間超越でありました。先生が熱心に信仰をお説きになるとお手が様々に動き、おからだを乗り出され、相手が誰であろうとかまわずつめ寄っておいでになる有様でした。また御心になかった比喻であれば、幾度でも繰返してお話しになりました。姥捨山のお話などはその一例であります。時間超越というのは信仰のお話をなさる時には、全く時間の経過に頓着なく三時間でも四時間でもぶっつけにお話になりました。

姉崎博士の母堂に何時間か熱烈にお説きになって、母堂

脳溢血は一カ年ほど御静養なされて少しは回復なされましたが、もはや往日の御体力は無く、それにまた御長男文常様が盧山の戦で戦死されたことが先生にとっては非常な打撃でありました。

私がたまたま広島から上京して求道会館にお参りしましたら、先生はお子様にお助けられて演壇におおがりになって三、四十分お話をなさいましたが、昔のお元気がなくその御講話のあとで、うしろのお部屋でお目にかかりますと、先生は御自分の心境を「歎異鈔第九章のとおりだ」と仰せられ「長男の戦死がどうしてもあきらめられない」と仰せられました。そこに私は何ともいえない温かい先生を感じそして少しもやせ我慢をなさらない先生に非常な親しみを感しました。

おもえば私は二十六才から五十三才まで先生の指導を受けたものでありますが、ただいまは七十才（昭和三十四年七月）になります、先生の御信仰を正しく受けているかどうか、何とも申しかねます。

ある時、私は一人の友人のことを先生に申しあげて、その友人に対して私がしっくり融合出来ないことを訴えしました。そのとき先生は「どっちもどっちだ。S君が理想主義ならば、きみは自然主義だ」と仰せられました。

これは私の急所にあたるお言葉で、二十台の私は理想主

はついに気絶なされたとかきいています。先生はごまかしなどは微塵もお話しにならず、相手に徹底するまではどこまでも肉薄するようになしてお説きになりました。

先生の晩年の大活躍は句仏上人問題についての熱烈な全国御遊説でありました。子が親を裁いて僧籍を剽奪するというようなことは、信仰上許すべからざる事である。信心の光に照らされれば上下の分がわかるといのが先生の御持言でありました。

そのために先生は、東本願寺を相手として正しい道にかけらせようと大変努力をされ、先生もまた僧籍剽奪をお受けになりましたが、屈せず闘争を奮闘なされたのであります。このことは先生の御信仰が現実に生きていたことを示すものです。しかしこの大活躍が先生にとっては致命的なことになったのであります。

明治・大正の親鸞聖人

先生は脳溢血でお倒れになりました。その直前に私の願を容れて広島においてになり（広島文理大学講堂で）聖徳太子の十七条憲法を題として特に熱烈にお説きになりました。私の家にお泊り下さいましたその時の印象は非常に鮮かに残っています、それが元気に満ちられた先生の御講話の最後になったのであります。思えば感慨にたえません

義のようでしたが、三十台になって自然主義に変わって参りました。理想主義の窮屈さから脱して、自然主義の気楽さになったのかも知れませんが、私自身としては自然主義になつたとは思いませんでした。三十台の私は大いに信仰を得たつもりでした。そして近角先生の口まねをして人に出あいますと誰れ彼れの差別なく、仏法を説くという有様で先生はその私をさぞあわれと御覧なさっていたのであります。

四十台になって私も少しは親というものの真実の有難さがわかりはじめたと思えますが、しかしとても先生の御心境にはおよびもつかないのであります。先生から御覧になれば、なまぬるい自然主義めいたあわれな奴と思召されたことと思えます。

先生は私にとって信仰上の父親という感じがいたします。お叱りをうけたことはあまり度々はありませんでしたが、確かににお叱りを受ける気持で先生を追憶いたします。

しかしまた、なつかしい感じもありまして、明治・大正の親鸞聖人とも仰ぎ、その御教の道を四十余年たどって参りました。これは私の死ぬるまで続くことであります。

昭和三十四年七月、女性仏教所載。

菅瀬先生五十年忌を迎えて

西本清人

はしがき

先生のごことは今まで菅瀬芳英語録を始め再三出版されて居ります。それを補足するわけでもありませんが、先生の御存命中声咳に接して居ります私共には、亡くなられて五十年の今日懐しさが一しおでありますので、今迄の語録に出ていないことで覚えて居りますことに自分の感じを添えて書きました。まことに拙文で粗末なことを書きまして先生の御徳を穢がさんことを恐れる次第であります。

先生は明治五年七月、広島県安芸郡矢口、教蓮寺十一代住職徹照師の二男として生れられました。

二十一年春、京都に出られて文学寮に学ばれ、俱舎、唯識を極め、二十八年叡山に登り天台を研められること六年、後東都に出られて同和学園を創設、傍ら全国に涉って布教伝道につとめ大乘無上の法を宣説せられました

▽ 大正六年四月五日、享年四十有六、往生の素懐を遂げ

られました。御病中の句に

強頭の坊主も癌で願往生

昭和四十二年十月 西本記す。

本文

先生が示寂せられてから今年で丁度五十年になります。御在世の当時、仰言ったこと、せられたことなどを今考えてみますと、自分の考えが間違っていたこと、味い方の浅薄であったことなどをつくつく思うのであります。

私は忘れ勝の男でありますから五十年前のことは殆んど忘れております。でも先生の温容慈顔、あの鬚の多いお顔、口髭、顎髭、ひかる眼を細めて笑みを含んで、口をすこし尖らせて、こつこつと仰言って下さる、墨の衣に墨の袈裟の先生のお姿は、今に目の前に浮んできます。

先生のお姿でお浄土で待っていて下さるように思われてなりません。

先生は十六の歳から俱舎や唯識をたたき込んで後、叡山で六年聖人のみ跡を慕うて廻峰行までして修行せられ、宗教上の学問は十分に研究し尽して居られたのに、それを少しも表に出さず、如來から頂かれた大悲を腹一杯に蓄えて誓願不思議を自分に味うて居らるるままを人に話されたのです。話は上手の人でもありませんし、又筆の人でもなかったのですが、先生は人にこういう風に話したらよく判ってくれるであろう、ああいう風に話したら人が得心してくれぬから、こう云った方がよい等、そんなことは少しも考えて居られないで、唯自分に頂いて腹一杯に燃えている大悲を素直に話される、それも御自身でお慈悲に感激して、口にそれが中々出ないこともありました。そういう時は、話をするよりはお念仏を称えていられる方がご自分にピッタリされるのでしよう、お念仏ばかり称えて居られるのです。ですからある時はお説教の一座がお念仏ばかりで済んだことがあります。けれど聴聞する人々も先生の燃ゆる歡喜が念仏となって現われるので、それに同化せられて一しよに皆お念仏して一座が終ったことがあります。

今から考えると、これは大変なこと、こんなことができる人が外にあるでしょうか。

先生の布教に対する熱意は超人的でありました。福間久

米吉氏（神戸の貿易商）の入信の問題ですが、同氏は癌で十数回手術を受けて其間一年半に及ぶ間、毎週一回乃至数回、乗り物もない道を本郷東片町から根岸まで徒歩で通うて、遂に福間氏を獲信せしめ、その一家の人々を信仰の人にせられた。その間普通の人であれば中絶せられたであろうと思われる程困難なことであった。

福間家でも本人はもとより、家族の人の中途先生の来られることを好まなくなつて、時には塩をまかれたこともあったそうです。先生はそんなことには頓着なくこの一家を入信せしめることがお自分に課せられた御報謝であると考えられたのでしよう、遂に目的を達して福間氏も最後は碎身の苦痛にも耐え、ひたすら念仏して大往生を遂げられました。こんなことは凡人の出来ることではありません。

明治中期から大正にかけてわが仏教界には沢山偉い方が居られました。前田慧雲、島地黙雷、島地大等、近角常観の諸先生を始め、清沢満之先生を中心とする浩浩洞一派の方々等学者であり大徳であられる方が居られました。

菅瀬先生はその方々に劣らぬ学問もあり徳望の方で常にこれらの方と交遊して居られました。然しこうした方々とは型が余程變つて居られたのです。ですから先生の話されたことを他の学者から先生に注意せられたこともありす

たとえば、これは語録にも出ておりますが、例の行誼上人の話です。

或時行誼上人のお弟子が卵をたべて殻を膳の上に置いてあったのを、他のお弟子がそれを上人に告げた。上人は「まあいい、世間では高僧知識をよそおうて魚を喰うて証拠を残さぬために骨まで喰うたものがある、それよりは正直でました」と云われたという話をせられました。これは禅の人を誹謗することになるから、やめた方がよいと注意せられました。先生は注意をせられたときは何も云わずにうなずいて得心せられたようであったが、次には又同じことを話し人間の五濁悪性の証拠の例に話された。

それどころか、私はこんな話までされたのを覚えています。当時政府の要路者が軍艦を英国のシーメンス会社に発註して、その間で賄賂を取った事件があつて問題となつたことがあつた。それを例にして禅僧の骨まで喰うたのはまだやさしい。軍艦まで喰う者が居るといふ話や、又東京市にはバラスを喰う役人も居る（東京市に土木の汚職事件があつて収賄した吏員が居たことがある）。

これも先生は頑固で人の注告もきかない一徹な性格だとして片付けてはならぬと思つたのです。先生は大悲を話す上には何ごとも遠慮する必要はないといふ信念であつたので実に尊いことであると思つたのです。

親はお前を真人間にしようと思つて引取つて下さるのだ、親の心が判つたか、と訓えられると、よく判りました二度と致しませんと誓うのです。でも暫くすると又やるのです。こんなことが度重なつて、先生も困られたことがありました。その時、先生は私共に云われました。

「親の慈悲はよく判つた、と云うが、それは、親はわしが悪いことをしてもどうにかして呉れるものだ、ということが判つたので、真のやるせない親の心が判つたのではない。真の親の慈悲が判つたのであれば、こういうことをして親に心配かけてはならぬ。わしを見捨てぬ親に感謝の心が出てこそ真の親の慈悲が判つたと云うものである。真の如來の大慈大悲に夜が明けたら懺悔と感謝の生活でなければならぬ」と教えられました。

ある時先生が東京から広島に来られるので駅に迎いに出了たことがあります。先生に「昨夜は車中よくおやすみできましたか」とお尋ねすると、

「それがね！わしはこうやつて車中で安気に眠て居るがわしがこうやつて眠るのには、多くの鉄道の人が少しも眠らないで番をしていて下さるからだと思つと有難うてお念仏ばかり称えてきた」

と申されて、私はがくつとしたことがあります。今でもこ

私は学園には居ませんでした。伯父（西本浅太郎）の家から時々学園に行つて先生の話を聞いたりお手伝いをしていました。先生の掃除のお手伝いしていますと、先生は廊下を掃きながら、例のように念仏の掛け声でやっていられて、私に云われるのは

「お念仏して掃くとこの廊下に仏縁が結ばれるからね」と。先生は随分オーバーなことを云われるなあと、その当時は思つておりましたが、今となって考えると私共は念仏の功德と云うことを軽く見て居る。如來より賜つた真実の念仏は万善万行の功德に満ち満ちた念仏であるといふことを感じないで、先生のように自分の行動の上に功德があらわれるとまで感じていないのだと思つたのであります。

五濁悪世の有情の 選択本願信すれば
不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみり
先生は自分でなざる行いの上にも念仏の功德の満ちていふことを信嘗していられたと思つたのであります。

広島某素封家の子息をあずかつて居られたことがありました。その子息が放蕩者で自分の物を売つたり質入れして料理屋に居続けけるのです。すると先生が親から金を送らせて借金を払うて連れて帰えられるのです。そして親の慈悲を説いて、二度とこのようなことがあつてはならぬ、

の先生のお味わいを私共の日常生活に忘れてはならぬと思つたのです。

それから後のことです。新聞にこんなことが出ておりました。ある宮さん（当時軍人の）が東京駅につかれて、当時の高橋駅長に「昨夜のこの列車の車掌は誰か、ストーブが暑過ぎて眠れなかつた」と大変なお叱言を頂戴したと書いてありました。この宮さんの考え方と、前記先生のお考え方と較べて深く教えられたことがあります。私共は氣に入らぬことがあるとすぐこの宮さんのような考え方をして不平不満になります。その前に先生のような考え方になりたいたいものと思ひます。

私共は若かつたので、先生は非常識なところがある。名利に恬淡で何ごとも無頓着で、しかも剛情で大分変わった人だと思つて居りました。

それは私だけではありますまい。学園の人も世間の人もそう見ている人が多かつたと思います。だがそれは先生の性格というよりも先生は御自身に如來より賜つた大きな何ものにも代えがたい宝を一杯に持つて居られるので、世間のことは左に行こうが右に行こうがどちらでもよい。世間的のことは少しも意に介して居られんであつて、風采は勿論、金銭上のことなど考えて居られなかつた。御自身

の仕事は一人でもお慈悲が判って貰えばいい、それが唯一の自分の仕事だと考えて居られた。

私共の日常生活を顧みますと、先生とは反対に、自分は世間の生活、名利追求に腹一杯で、如来より頂いたお慈悲——お念仏はすみの方に小さくしているどころか、影も無いほどになって居ります。だから不平、不満で明け暮れを過して居ります。願くば先生のように日常腹一杯に大慈を満たして、よきにつけ、悲しきにつけ、念仏の生活を送りたいと存じます。

先生の口喉内の癢が進行して重態になられ、命旦夕に迫られたときに、近角先生が見舞われて筆談していられます。浅原才市が云うたように、如来の生肝（いきぎも）の正味の法話であります。その中に近角先生が

（近）報仏報土ということは、其時にあらざれば分らぬと我等を憐愍して下さる御慈悲の塊に候。大悲の誓願に酬報するが故に眞の報仏土というとの意味。

どうしてくれるのか、往って見ねば分らねど、飽くまで見捨てぬとの御眞実が分れば、あなたまかせ〜。

これに対し菅瀬先生が
（菅）あくまで見捨てぬお慈悲、往生を誓われた往生浄土が有難し。

近代めざめと宗教心

宮 地 廓 慧

私自身は私の研究室の女の助手に、私だけのために求めてお茶を酌ませたことは、恐らく一度もない、といえる。自己弁護のように聞こえるかも知れないが、このことをまず申しあげておいて、さてその上で、私のこれから申すことに耳を貸していただきたい。

「あたしはお茶酌みにこの会社へ入社したのじゃありません！」

と云って、先輩社員にお茶を酌んであげることとを、さも侮辱されたかの如く考えて、拒んだり、嫌々ながらやっている、いわゆる近代的な女性(?)が沢山いるようである。

封建的な女性観を打ち破ることに機会ある毎に努めてきた私として、女性なるが故にお茶を酌みなさいというのは決してない。結論的に申すなら、男性であろうと女性であろうと、他人のためにお茶を酌むだけの雅量と愛情とがあつて欲しいと思ふのである。それが楽しい職場の空気に

と云うて居られます。実にきわどい御教化であります。近角先生の「どうしてくれるのか往きて見ねば分らねど、飽く見捨てぬとの御眞実が分ればあなたまかせ〜」この問答を見ますと、歎異鈔の九章を拝するような気が致します。池山先生の「汝一心正念にして直ちに來れ」の勅命の意識「オネガイダカラ、スグキテオクレヨ」と如来より頭を下げてのお願いの文と比較して見ますと、表裏一体の勿体ない御自督であり、私共に残された三人の御大徳の大悲信樂の極致のお言葉であると存するのであります。

先生の思出は色々あつて尽きないのでありますが、要するに先生は学者であつて妙好人であつたと申されましよう。昔から妙好人は愚者で無学文盲の人が多かったのですが先生は学者であつてしかも、行いは一文不知の妙好人に似た行いをして居られたと云えると思ひます。

藤先生は、「才市を「仏に酔うた人」と云うていられますが、先生は「お慈悲に酔うた人」と云えると思ひます。即ちお慈悲に三百六十五日酔うて一生を送られた方でありました。私共はすこしでも先生の氣持で生活させて頂きたいと存する次第であります。

終り

役立つのなら、お互にこころよくお茶を酌み合つたらどうだろうか？

一杯のお茶も、ひとのためには酌もうとしないような人の集つて居る職場が、果してその他のことでもうまくこなやかに運んで居るだろうか？いや、一応外面的にはスムーズに運んでいても、實質的には、まことに冷い、事務的、機械的な職場になつてはいないだろうか？人間的なおいのない、こういう乾からびた人間関係で成り立った、いわゆる民主社会(?)というものが、果して幸福な近代社会といえるだろうか？

×××

×××

あなたが喫茶店でデートする場合の、互いの応対について、ちよつと考えてみて下さい。男性の方はまず運ばれたしほりタオルをとって女性に渡してやるだろう。女性は運ばれたコーヒーの一方をまず男性にすすめるだろう。

こんなときに、

「俺は男だから女の子にタオルなどとしてやらないぞ」
そんなことを考える男性がいるだろうか？

「あたしは男性にサービスする義務なんかありませんよ！」

そんなこと思ってコーヒーをすすめる手を引つ込める女性があるだろうか？

愛情によって満たされ尽くした人間関係には、男の優越感だとか、女の卑屈感などというものはや意識には登ってこなくなる。そこにはただ相手をどうすれば幸福にしていられるか、というお互いの、細かい心づかいがあるばかりである。少くとも私たちには「恋愛」という、人間同志の特殊な愛情関係において、この事実を体験することができ。それも極めて自然に、極めて素直に……。そしてそういう生命のありかたが、自身の生命のもっとも充実した状態、云い換えるならば、もっとも満たされた幸福感であることも、恐らく何人も素直に承認できるであらう。

×××

×××

恋愛の場合における、右のような人間関係は、たしかに或る特殊なケースの特殊な時点だけのことで、これをただちに一般化して、すべての人間関係に及ぼすことは、勿論不可能だし、ましてそれを要求することは、むしろ愚かしい要求とさえいえる。

のではなからうか？女性だからといってそれに卑屈をいだいたり、上役だからといって躊躇したりするのは、まだほんとうに人間が練れていないからである。人間のほんとうのありかたにめざめていないからである。

現代日本の社会には、封建的な女性観にとらわれて、女性の事務員にお茶を酌むことを強要する男性本位の会社や学校がまだ沢山あるようである。こういう誤った観念を打ちくたくために、めざめた女性が男性に抗議することは勿論私も賛成である。たしかに、めざめねばならない方は、むしろ男性側である、ともいえる。

しかし男性側にしても、女性側にしても、だからといって、もう今度のお茶酌みは、自分のためだけにやればよいと思つたら大きな間違いである。むしろ男性も女性も平等に、他人のために喜んでお茶を酌んであげられるような、そういう素直な愛情の人間になるこそが、この際望ましいのである。そういう素直な人間関係を生み出すためには各人が人間的に高められ、練られてくる必要がある。云い換えると、宗教的にめざめてくる必要があると思う。

×××

×××

そこで私は結論として申しあげたい。——近代的めざめということも、その根底に宗教的めざめがなかったら、ほんとうのなごやかな幸福な社会をつくり出してはこない。

しかし、よくよくそう承知した上で、なを敢えて私がここで申したいのは、片鱗的にもせよ、恋愛の人間関係において、私たちが容易に体験し得る、右のような充実した生命のありかたこそが、人間本来のいのちのありかたを暗示している、いわばほんとうの人間関係の縮図ともいえるべきものだ、という点である。極端に聞えるかも知れないが、恋人に対するような心づかいが、すべての他人に対してもとれるようになったら、そこにその人自身の最高の幸福がある、ということである。

このことは、まことに実現の難しい、殆んど不可能としか思えないことであるが、しかし間違いのない、不滅の真理なのである、人間の道なのである。

×××

×××

宗教生活とは、私にいわせるなら、この不滅の真理を信じて、殆んど不可能としか思えないような、この愛情の人間関係を、あえて実現しようとする心づかいにほかならない。それは、いまの時点の私が、いまここで、最善を尽くして実現しようとする努力であつて、いまのこの私を離れて別のとき、別の場所でなされる努力ではない。

従つて、他人のためにお茶を酌むことが、職場をなごやかにすると気がついたら、男性でも女性でも、素直に、こころよく酌むことにつとめようとするのが宗教心ということも

そしてそういうなごやかな幸福な社会の人間関係はどうしたら実現できるか？それを暗示してくれる、もっとも手近かな人間関係は、恋愛である、と。

従つて恋愛の体験をもっているほどの人なら、その体験を手がかりとして、ほんとうの人間関係を追求して行けばきつと宗教的な愛情の人間関係にめざめてくるであらう。

そして手近かな日常生活の中で、少しでもこれを実現して行くことに心がけるようになるであらうことを、私は信ずるものである。

「人生手ばなし」

「人生手ばなし」とは近角先生がよく仰せられた御言葉であります。名譽、地位、財産、健康、人間、すべてたよりになるものは此の人生に一つとしてない、人生は手ばなしである。執着を離れよ、たとい師匠や友人や肉親といえども、あてにはならない。人生無常である、何物か此の人生に永遠のたよりになるものがあるか。たよりにしていた親に死なれ、兄弟に死なれ、友人に死なれ、我子にさえ先立たれるのが此の人生の現実相ではないか。人生手ばなしになれ、そして如来の無量寿、無量光を直接に我が身に受けよ。これが近角先生の仰せられる人生手ばなし、の意味かとおもうのであります。

△歎異抄身説記▽

兄の霊前に申す

松村繁雄

昭和四十二年九月二十九日、あなたは今日七十五才の生涯を終えて、目出度く安養の浄土へ帰って行かれました。親族知己一同は、今、あなたの遺骨の前に集って、お送り申しております。

頼もしや、何れが先に往くとも

いずれは同じ、みほとけのくに

お別れは淋しい。されどわたしもやがて、みあとを慕うて同じ浄土に参らせていただきます、ありがたいことです。

そうは申せ、昨日まではあれよこれよと語り合ったあなたが、今は、コノ小さい骨壺に納まって、呼べど応えてはくれません。昨日の懐しい姿は、しずしずと立ち上る線香の彼方にかくれて、最早見ることが出来ません。これをどうして嘆かずに行われましょう。

不思議な不思議な因縁によって、同じ世に生れて同じ谷川の水を汲み、同じ野山に草を刈って生かされ、ことに同

したが、そうするより他に途のない、その場の仕儀でありました。

私共はまことに意志の弱いものであります。「何とかしなくても一度元氣になりたい、もうすこし生きたい」と思いつめているあなたに「もう駄目ですよ」とはどうしても云えなかったのであります。そのうちにだんだん衰弱が増して、あなたも漸く「此度はとても駄目」と思うようになりましたが、それでもまだ生きたい生きたいの一念で、看護婦の差し出す薬を、あなたは、枯木のように瘠せ細った掌に載せて、拜むようにして吞みました。わたしはその姿を正面には見ることが出来ず、顔をそむけて泣きましたが、それでもなお事実を告げることが出来ず「そのうちにはよくなるですよ」と、どこまでもウソを言わねばならなかったのです。

人間というものは、ウソを言うて、それを親切であると思ふほどに不親切な、なさない愚かなものであります。まことになさけない境涯であります。

然るにあなたは、今は、その迷いの境涯を離れて、み仏の眞実に召されて浄土に帰られたのです。お別れは淋しいけれど、わたしは心から「兄さんしやわせたったなあ！」と申さずにはられません。ことに、臨終のいよいよ迫った二十三日の晩方でありました。私が枕元に座りますと、

じ乳房に育てられて計り知れないつくしみを受けた兄弟であるものを、暫くの別れとは言え、名残り惜しいことでもあります。万感胸に追ってまいります。

あなたが日赤病院に行ったのは八月二日でありました。診察の結果は、胃癌の末期で手の施しようもないとのことでしたが、あなたにはそれを隠してありました。入院して輸血や注射といろいろの手当をうけても食事が摂れない。本當の事を知らないあなたは、次第に瘠せて行く手足を撫でては「どうして食べられないのであるうか、少しでも食べられるようになったら……」と焦燥の毎日が続きました。折角の御馳走にも箸もつけずに、お見舞にいただいた梨もリンゴもそのままに、ションポリとうなだれて眺めるだけのあなたに、わたしは「そのうちには食べられるようになるよ」と、ウソを言うてゴマ化しておりました。

たった一人の肉親の弟であるわたしが、ウソを言うてゴマ化さねばならぬということは煮え湯を呑む思いでありました。あなたは、骨と皮ばかりの手を差しのべて「脈を看てくれよ」と言いました。私は、いよいよ話さねばならぬ時が迫ったので、勇氣を出して

「兄さん、もう暫くですよ。如来様が待っておられる。人様が待っておられる。母も待っている。先に逝った嫂さんも待っている。死ぬるのではありません、生れるのですよ。わたしもやがて参ります。み仏の永遠の世界へ一緒に生れるのであります。それでも約束の時間が来るまでは参られません。苦しいでしょうが、もうしばらくですよ」

と申しますと、あなたは、莞爾としてうなずいて、ナムアマダブツ、ナムアマダブツと、み名を唱えてくれました。まことに尊くもありがたいことでもあります。

おもえば、あなたの七十五年の生涯は、まことに業苦の連続でありました。若くして父に死なれて、それからの心労は並大抵ではありませんでしたが、就中、末女の延子さんは、折角学業を卒えて、花は是から咲こうというところであんたを残して散って行き、更に愛妻にも先立たれたということは、まことに大きな悲しみでありました。

幸によき家庭に恵まれて、病床に伏しても手厚い看護を受けて物に不足は無かったけれど、さぞやあなたは、無常不定の人の身の哀れと、一人来て一人往かねばならぬ孤独

に、悄然とひとり涙したことでありましょう。その上に、最後には胃痛、しかも末期の難症にかかって、医学の力も及ばず、食事も喉にとおらず、ただ僅かの水だけで生きねばならなかった苦闘四十日の哀れさは言語に絶するものでありました。それなのにあなたは、愚痴も云わずに、藻掻きもせず従容とした臨終でした。それはあなたの穏健な天性の、光る美德でありました。

「捧で切れない荷物の重さ前うしろ」とは山頭火の遺し句であります。夫々に重い宿業を背負うてあえぎあえぎ、とほとほと歩まねばなりません。まことに此世は苦の娑婆であります。それだけで終るのでしたら、たとえ百年の寿命を得ても、空しい夢であります。仏の眞実の光によって、この人生が永遠の世界への出発点とさせ頂けますが、兄さん、あなたは、私共のその先達、実証者となつて浄土へ還られました。

水ばかりのんで、日々に衰えて行つたアノ苦惱の姿も、今また、仏の眞実に導かれて莊嚴な浄土に帰られます姿に「娑婆永劫の苦を捨てて、浄土無為を期すること、本師釈迦の力なり、長時に慈恩を報すべし」の和讃を思わずくちずさみませんでした。南無阿弥陀仏。

さていよいよお別れであります。名残はつきません。

賢に遇えばおのずから寛なり

花田正夫

人生の行路、千變万化、迂余曲折の多いことあります。が、そうした時、何時も煩惱の乱れを持てあまして途方に暮れるのであります。幸によい理解者にあつたと、自然に心がやわらぎひらけてまいります。ことは大なり小なり誰しも経験のあることでもあります。

そこで、荒漠とした人生において、よい理解者を求めて心のオワシスにしようと願いますが、思うように行かぬ人生とて、利害の一致する間こそよい理解者らしく表面は振舞いますが、ひとたびそれが相反するとなると、昨日の友は今日の敵と転じて行き、そこに幻滅又幻滅の悲哀をなめるのであります。

こうした時、知らされますことは、自分は相手によくしている、少くとも悪いことはしていないのに、相手はいかにもしぶとい、わからず屋であると不平不満におちます。さて、自分が本当の善であれば、相手の出方によって崩れるはずはないのに、孔子も「人識らずしてこれをいさどお

あなたが生涯かけて粒々辛苦して耕した田圃には、年毎に黄金の波が打つことでしょうけれど、新築のこの家の横井の水はいつまでも滾々として湧き出るでしょうけれど、あなたの姿はもう見ることは出来ません。孫の笑美子さんは近日結婚しますけれど、あなたはその晴姿を見てはくれません。あなたが七十五年踏み馴れた松柄峠を自動車は頗繁に往き来しますけれども、あなたは再びあの峠を越えることはありません、悲しいことでもあります。

然しあなたは、今は仏の無碍の光明と一味になつて、何時までも凡情に恋々として悲しんでいるわたしを、いよいよ憐んで下さることでもあります。

「名残り惜しくおもえども、娑婆の縁つきて、力無くして終るとき彼土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころなきものをことにあわれみたまうなり」との、歎異抄九章の聖人のみことばが、いまはしみじみと身にしみ渡ります。

兄さん、わたしもほどなく、必ず仏の世界にまいらせていただきます。しばらくのお別れであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。こうした私共への「俱会一処」のみ仏のみちかいこそたのもしいかぎりであります。

謹みて白す。

「ならずまた君子ならずや」と教えますように、それが徹底して出来れば最早、「君子」でありましょうが、私共は悲しいかな、みな崩れる「小人」の徒であります。して見れば、自分も相手のよき理解者ではありません。そのような自分が相手にだけよき理解者であつてほしいと求めるのは、代金を支払わずに品物だけを要求するといふ大きな無理、自分勝手な行為であります。「物を盗めば賊であるが徳を奪うものを何と呼ぶべきか？」と清沢先生が誠められたとあります。

ここに自分自身の駄目さが知らされると共に、他に理解者を求めることの身の程を知らぬ要求であつたと気付かされるのであります。

このように他に向けられていた自分の眼が、自分自身にむけられ、自分に絶望するより外ないことが知れます時、そこは身から出た錆ではありますが、あまりにも暗く、あ

まりにも狭く、それに落着けなくなりす。かといつてそこから脱することはもとより不可能であります。

こうした私のして見ようのない胸にひびいて参りますのが、聖徳太子の御慈訓、

「賢に遇えばおのずから寛なり」
であります。

然し私共はそうした聖賢の方が地上に存在するとは夢にも知らず、よしんば居られましてもそれをそれと見抜くことの出来ない盲同様の身であります。不思議にも存在せられるのであります。

良寛師の逸話に

「師、余が家に信宿目を重ぬ、(二三日泊られた)。上下おのずから和睦し、和氣家に充ち、帰り去るといへども、数日の内、人おのずから和す。師と語ること一夕すれば、胸襟きよきことを覚ゆ」と。

盤珪禪師の逸話に

「姫路に一人の盲人あり、ひとの美声をきいてその心事を悟る天才をもっていた。その盲人の常に云うには

「賀詞(よここびことば)には必ず愁いの響きを帯び、弔詞(くやみことば)には必ず喜びの響きがこもる」

私共はとかくその結果ばかりに眼をつけて感心し、別人あつかいにし、偶像化して行きますが、これでは両師は本当に淋しい苦笑を続けられるでしょう。

私がかつて、旧制中学生の頃、鹿児島出身の先生に歴史を教わりましたが、何時も「西郷先生が、々々々」と、西郷先生の逸話を聞かされました。そのうち、

「人を相手にするな、天を相手にせよ」

と云われたとき、偉人は違うなあ、我々は友達の成績の良し悪しとか、先生の受けのよしあじ等々人間をばかり相手にして、天を相手にするなどは思いもよらない、全く虫蠅(むしけら)同様な小人の輩であるとか心を打たれておりました。然し後年のこと、九州出身の信友から、

「西郷先生が、天を相手にせよ、人を相手にするなといつも言われたのは、御自身が人のことが苦になってならぬ性質の人だからそう度々言われたのだ」

ときいて、ああそうだ、征韓論で破れると軍服も何も棄てて桐野をつれて郷里に帰るような人であるからこそこの言葉が必要だったのか、と大いになさずかれ、それから西郷先生の偶像是消えて、かえって同じ人間としてのしたしみを持つようになりました。

そのように、良寛師、盤珪師についても同様なものを覚えるのであります。かなめなことは、両師ともに、仏心の

と。さらに語を継いで

「人心の機微はこうしたものであるが、禪師だけは別で師の音声を聞くに、得失、毀譽、尊卑、上下のどういう場合にも異色を容れず、やわらぎにみちた妙音声であつて、師に接する者、その声を聞いただけで信に入ることゝもむべなるかなである」と云った。」

両師の徳香はおのずと遇う者の心をやわらげ、今まで持てあましていた心のもつれも自然に消えて行つたことが知らされます。まことに聖人賢者と称えられ、後の世までも余香が薫っております。

さてこの表面の師の徳だけを知ります時、全くの別人で私共とは隔絶した世界に住む人としか思えませぬが、ここに愚考いたしますのに、両師にしても煩惱具足の方に相違ありますまい、して見れば腹も立ち、欲もおこり、そねみねたむ心も充分に持っていられたいと思ひます。ただそうした煩惱の火中に咲く蓮の花というべき仏心のまことを仰ぎその仏心のまことのおのずからなるはたらきとして、煩惱の水がとけて功德の水、柔和忍辱(やわらぎ)のこころと転じ続けて行かれた、その自然の徳香が仏徳の照りかえしとなつてあたりを薫つたのでありましょう。

まことを仰ぐことによつて、御自身のやすらぎを頂き続けて行かれた人であつた、決して人間ばなれした方ではないという一事であります。

さてこの仏心のまことを身にうけて行かれる人の存在は、夜空にかがやく星や月の存在にも比すべき方でありす。ことに北斗星は、人類開闢以来、正しい方角を指示し続け月光は夜道を行く人に大きな灯炬となつてきたように、人々の心の闇のあかりとなり、人生の行方を示す指針となつた方々であります。

然し、そうした方々に「あなたは立派な方で、尊い方ですなあ」と申せば、異口同音に「御冗談でしよう。私共は黒い塊りであります、あなた方に光って見えるのは太陽の光の照りかえしです」とお答えになるでしょう。

思えば、こうした方々もまた「賢に遇う」一事を体得されただけあります。この「賢」とは「仏智」であり「仏慈」であり「仏心のまこと」であります。

さて、念仏者の徳を蓮如上人が讃えられて

「一文不知の尼入道のあらとうとやありがたやと称うる念仏をきいて人は信をとるなり云々」

と仰せられました。本願を信じ念仏申される人こそ、泥沼に咲く蓮華に等しい存在であります。その人々を縁として

仏法が世間に自然にたたよいつたわるのであります。

前の両師は出家精進の立派な生活者で、在俗無智の念仏者とは外形は雲泥の相違がありますけれど、その内心においては、出家をほこり、在俗にこだわることなく、共に仏心のまこと一つを身にうけて、それ一つをたのみとされた方々であります。

聖徳太子は「賢に遇えば」とおしえられると共に、同じ憲章第二条に

「篤く三宝を敬え、……人はなはた悪しき者すくなしよく教うればしたがう。それ三宝によりまつらば、何をもってか枉（まが）れるを直（なお）うせん」と、その根源を指さされ、しかも御自らをまがれる者、如何ともしてみようのない者と告白され、ひとすじに仏心のまことによりまつられて、御自身の指針とやわらぎを頂かれると共に、日本のあるべき道をおのずから見出していられます。

御年三十歳前後に体得せられた仏道の玄意は、そのまま太子を縁として日本の光明となって輝きはじめました。太子にふれる人々の喜びは如何ばかりでありましたことか。不幸にも御年四十九の時、疫病のために急逝されました。「この時に大臣以下群臣百官、天下の衆生、ことごとく

実に聖人ほど太子を渴仰し随喜された方は他に見出せません。そこに賢者の徳光が未来際を尽くして輝く有様をありありと知らされます。

私共は幸に生を日本にうけ、千三百年の昔から太子の徳光をこうむり、七百年昔から親鸞法然の両聖の徳化をいただき、現に念仏の声の津々浦々に聞かれ、念仏者は社会の各層にあって、内心に深く仏法をたくわえられながら世相に順じて、白色白光、黄色黄光、赤色赤光の薫りをもつて活動して下さることは何とありがたいことでありましょうか。日本が金持になろうが、貧乏であろうが、世界から認められようが認められまいが、そういうことに障えられないで、仏法の流布し、人々の心の華の開けて行く国として、文字通り宝の島であります。聞法一番、無上の慈光を仰いで念仏成仏の白道を辿らせて頂きましょう。

「名を望むなら諸仏賞讃、利を願うなら無上大利」と九州の老師が対句にして常に述べられたことも、日本に生れた者への大いなるはげましの慈訓でありましょう。

父母をうしなえるがごとし、哭泣（なきかなしむ）の声行路にみたり。天皇これをきこしめして声をあげて大に哭し給う。大臣以下又大いにむねうちほどばしりて相語りて曰く、日月ひかりをうしなない、天地すでに没しぬ、と。……葬送の後、百姓遠くより来り、相あつまりてさけびなくこと日夜にたえず云々」

と太子伝暦にありますのも大いにうなずかれます。私は明治天皇の崩御せられた頃小学生でありましたが、御病氣重く、いよいよ亡くなられたと報じられた時、困をあげての悲しみを身に深く刻まれておりますので、すこしは当時を想像出来るのであります。

太子から六百年おくれて出世せられた親鸞聖人は御一生の大切な危機に何時も太子の御導きをうけられました。十九歳の時の「汝の命根十歳」の暗示、六角堂の参籠の二十九歳の時の靈告、三十三歳の時の妻帯への夢告、三十五歳の時念仏法難の中で「菩薩の引導」として太子を渴仰せられ、御晩年には太子の御伝記を写されたり、沢山の太子奉讃の和讃を作製されました。

無始よりこのかたこの世まで聖徳皇のあわれみに多々の如くにそいたまい阿摩あまの如くにおわします和国の教主聖徳皇、広大恩徳謝しがたし一心に帰命したてまつり奉讃不退ならしめよ

無題

水谷美津子

一人がさびしいから
それでいつもお念仏がついて下さるのでしようか
私を裏切るわたしのこころ

またも落ちてゐる悪へののがさ

そんな私を包む様に念仏はあふれる

突然わき出る泉のように

——いかりのがさ、また青さ

四月の気層のひかりの底を

つばきし、はぎしりし、行き来する

わたしは一人の修羅なのだ——

宮沢賢治のこんな詩を

心の中につぶやきながら

動き走り行き交う人の中にまぎれ立つ時も

その中に私は居ない。

夜空にバスを待ちながら

ほのかにあふれる念仏の

御声の中に埋まる時生きている私があるのです
ただ念仏の中にだけ生きている私があるのです
南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

あ と が き



秋空はいやが上にも澄み渡って、草木も紅葉して秋のみのりを迎えております。

この秋、信友、荒川惣兵衛さんから二万五千語を収録された外来語辞典を頂きました。荒川さんは古稀を迎え最近視力も衰えられた中を四十年にわたる大労作によって本書を大成されました。金田一京助氏も「人間、一つの仕事に一生涯をかける覚悟なら、必ず一応はまとまったことがきつとできるものだ。然し此度の大外来語辞典はそうそう余人の企てられる程度のものとは全く違う。……およそ日本の古来の文献という文献に一語一語丹念に克明にあたってあらゆる用例を忠実にあげて片言隻語もいやしくもしないその良心、一行一行アツと心を打たれる。何百何千の学者が世にあってもこれほどまでには行くまいと頭が下がる……。」

其他各方面の人々が驚歎していられます東京の角川書店から出版され定価三千元、送料百二十円、四六版一五三六頁であります

す。現代生活に不可欠の辞典であり、私も非常に便利させて貰っております。

「近角先生の追憶」は明治百年を迎えまして、先生をお偲び申すよすがと思ひ、女性仏教に発表せられました福島先生の御原稿を頂きました。

菅瀬先生五十回忌に岡山の西本清人様から先生の語録の断片を頂きました。学問なさりながら学問にとらえられず一筋に念仏生活せられた先生に心打れますことです

宮地麗慧さんからめずらしく原稿を頂きました。北米に一年、更に台湾で学生に仏教を講じられるなど忙しい中にことに近代的めざめの上に宗教心を提唱して下さいました。

松村繁雄さんには兄さんの死を縁としての述懐の記を頂きました。

謹告 (誌代変更)

慈光の誌代を来年一月(第二十卷一号)から値上げさせて頂きますからよろしくお願いいたします。

内地、半年分二百五十円、(送料共)
 一年分五百円、(送料共)
 外地、半年分一弗、
 一年分二弗、(送料共)

但しすでに前納して下さっている方々はその代金が済みます間そのまま据え置きとさせて頂きます。

御案内

十一月廿七日、午後六時半、一道会館にて、

仏教講話 福島政雄先生

◎ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、南区駈上町、一道会館、一道会例会。

◎ 市電新郊通り一丁目下車。

◎ 毎月二十四日、午前・午后、昭和区小坂町、教西寺、法話の集い。市電御器所通り下車。

定価 半年 二百円(送料共)
 一年 四百円(送料共)

編集・発行人 花田正夫
 名古屋市南区駈上町二ノ八八
 電話八二一局七〇三七番

印 刷 人 本田政雄
 愛知県西加茂郡三好町大宇福谷
 名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番